

法華經に現われた法師と化人

——法師品を中心として——

上 田 本 昌

一、

法華經では記小久成を始めとして、重要法門が開顯されていることは周知の如くである。これに伴い經典の重要性と最高であるとする優越性が、しばしば語られているが、これと同時に此の經典を仏の滅後に弘通すべきことが、強調されているのである。

惟うに教法を説いた仏にとっても、又其の教法を經典として成立させていった関係者達にとっても、この經典が末の世に、如何に弘通されていくのか、という問題は最大の関心事であつたろうと考えられる。従つて此の經を受持し、弘通する者をこの上なく優遇し、弘通すべきことを随所で勧奨しているのである。

法華經を所依とし、本化仏使としての使命達成に生きた日蓮聖人は、この「弘通すべきである」という經文を色説し、衆生救済の爲の弘經生活を実践されるに至つたのである。その流れを汲む門下に於て、今日、「総弘通運動」が叫ばれ、「伝道宗門」が標榜されている。これは当然のことであるが、然し「弘通」について、法と人の問題を究明しておかなくては、まことの弘通にはならない。

法華經に現れた法師と化人（上田）

法華經に現れた法師と化人（上田）

古来、この問題については、論究されて来ている如くであるが、専ら法華經教義の立場で、特に法についての論述はなされているものの、人については「説く者」と「聞く者」の一応の解説にとどまり、更に具体的な「自覚」や、「在り方」にまでは及ぶことが少ない現状である。

そこで、爰では弘通の「法」より、弘通する「人」を中心に、一考を試み以て弘通の意義を法華經、特に法師品の中から考えて行こうとするものである。

二、

法華經は方便品から、授学無学人記品までが迹門の正宗分であり、専ら舍利弗を始めとして、慧命須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連といった仏弟子声聞衆を対象に、法・譬・因の三周説法を用いて、授記を与え二乗作仏によせて、一切皆成を説示してきたのであるが、法師品からは対告衆が一転して薬王菩薩に因せての説法となっている。即ち相手が声聞から菩薩へ移り、内容も「法」からその法を弘通する「人」へと移ってきているのである。

令法久住の重要性は論を待つまでもないが、何れの經典であっても久しくその經典が永い期間に渡って、衆生に及ぼす影響が考えられていることは勿論である。特に仏の究極の法門が開顯され、一切皆成の本願が達成されたとする法華經にあつては、その弘通に当つても又慎重な上に、更に重厚な因縁によるものであることを説いているのである。法師品では先ず始めに、

「如来滅度之後若有^レ人聞^二妙法華經^一、乃至一偈一句二念隨喜者、我亦与^二授阿耨多羅三藐三菩提^三」⁽²⁾とあつて「人」をあげ、この人は一念隨喜者であり、三菩提の記別が与えられる人であるとし、一偈一句聞法の功德

が、直に授記と関連してゐることを明らかにしている。一念隨喜聞法の功德でさえ、授記に直結するのであるから、況や説く側の功德は更に大なるものがあることになる。即ち

「若復有^レ人受^三持、讀^三誦、解^三說、書^三写、妙法華經乃至一偈於^三此經卷^二、敬視如^レ仏種々供養（乃至）當^レ知是諸人等、已曾供^三養十萬億仏^二於^三諸仏所^二、成^三就大願^二慳^三衆生^二故、生^三此人間^一」。

とある。ここでいう「人」とは如説修行の人であつて、五種法師を實踐する人、即ち「法師」のことである。本来、法師とは「法の上の師匠」であり、末法に仏に代つて正法を解説する人のことである。

この經文によれば、こうした人、所謂法華經を種々に供養したり、演説する「法師」はすでに曾て十萬億の仏を供養し、諸仏のもとに於て大願を成就した者であつて、三菩提を成就した大菩薩であり、「如來の供養を以て之を供養すべき」者であるとしている。これは一偈一句を聞いて、他の爲に解説等を行う者であり、まして況んや「尽して能く受持し種々に供養せん者をや」であるとしている。既に譬喩品の中で「若有^レ信^三受此經法^二者是人已曾見^三過去仏^二恭敬供養亦聞^三是法^二」とあるが、法師品の此の文の方が、一層明解であるといえる。日蓮聖人は、『守護國家論』を始め、『南条殿御返事』、『千日尼御前御返事』等に此の經文をあげているが、更に注目すべきことは、右の經文に続いて、

「當^レ知是人、自捨^三清淨業報^二、於^三我滅度後^二慳^三衆生^二故、生^三於惡世^二廣演^三此經^一」。

とある点である。仏の滅後に法華經を弘布する人、即ち法師は過去の世に多くの仏に使えて菩提に至り、自身の大願を成就して清淨の業報を得ていることになる。これは明らかに如來と等しい境地を得ていたことを示すものであるといえよう。

法華經に現れた法師と化人（上田）

法華經に現れた法師と化人（上田）

しかるに「是の人」即ち法師は、永年に渡つてようやく修し得た「清淨の業報」を、「自ら」捨てて「衆生を惑むが故に惡世に生れて広く此の經を演ぶるなり。」というのである。一旦得た証果・清淨の地を惜しげもなく捨て、再び苦の惡世娑婆に生れ、法華經を演説していることになるのである。

これはまさしく大菩薩であり仏使たる者の行動であつて、「自捨清淨業報」という点を重視すべきである。清淨の業報に安住して独り仏果を楽しむというのであれば、自己の成仏をのみ願う二乘衆と同一であり、十界皆成を本願とする本化の立場からは遙かに離れたものとなる。「自捨」とは言うまでもなく自発的に、自ら進んでということであり、「志願」してということになる。清淨の業報を捨てるということは簡単にできることではない。それも只單に捨てるだけではなく、衆生を惑むが故に救済の為に惡世に生れて、広くこの法華經を弘めるのであり、演説することに精進するということであるから、自己を顧みない決意と、犠牲的精神、更に困難を恐れぬ覚悟を必要とすることになるのである。

最初は「一偈・一句」なりとも受持・誦誦・解説・書写することを挙げているが、次第に「此の人」は既に大願を成就し、如来の供養を以つて供養さるべき大菩薩であるとし、更には「広演三分別、妙法華經」と推移してきているのである。初めは一文一句であつても、やがては広く法華經を演説できるようにならなくてはならないことになる。だれでも最初から「広演分別」は不可能であらうが、積み重ねにより、その事の実現化が得られることになる。經文上にはこうした推移のあることがわかる。

かくて「是の人」即ち「法師」は「當知是人、則如来使、如来所遣、行如来事、何況於三衆中、広為人説⁽⁸⁾。」とある如く、「如来使」として「広為人説」を目するのである。法師は如来使であるということは、この經文

からして既に明らかであるが、それが実は今生での出来事ではなく、過去世からの深遠なる因縁によるものであることが、同時にわかるのである。

従つて法師たる者は、偶然此の世に生を受け、偶然の契機で法師、即ち僧侶となり、たまたま法華經と出会つて弘通することになった、という偶然性の積み重ねによるものではないことが判然としてくる。

法華經を弘める僧侶は、此の法師品の所説を能く理解し、信解して体得しなくては、如来使としての使命は達成できないことになる。如来使として「広演此經」を果す為には、悪人による毀罵・迫害を覚悟しなくてはならない。日蓮聖人はこの如来使としての自覺に立ち、種々の迫害を経験されつつ、經文の色読によって、使命の達成をはかり、以て如来使の範を示されたのであった。その流れを汲む門下が、法師品の此の經文を色読し、自ら願つて此の世に生れ、法を弘める為に精進している者であることを、改めて再確認しなくてはならない時である。「総弘通」とはすべての法師が、先ず法師品の此の經文を色読すべきことの意味であるといえよう。如来使としての法師として生きた聖人は、また

「当レ知是人、以三仏莊嚴、而自莊嚴、則為如来、肩所三荷擔」。

とある如く、常に如来によって荷擔され守護されるに至つたのである。法師として「広演此經」の役目を果す者は、仏も又一心にこれを加護し荷擔することになるのである。

三、

因みに梵文では法師品がどのように語られているかを、岩本裕教授の訳本から見っていくことにしよう。（以下梵文

法華經に現れた法師と化人（上田）

という。）先ず「法師」については、「教えを説く者」とあり、仏の教えを「説明し、伝え、書き、書いて記憶し、唱える人々」⁽¹⁰⁾ということになる。また「人に聴かせ、教え示す」ことのできる者は、「如来であると知るべきであり、神もともに住む」⁽¹¹⁾とあり、漢訳經典とはば同様であるが、より明瞭にわかりやすく述べられている所が多い。「教えを説く者」は、「如来であると知るべきである」という説は、即ち法師は如来であるということになり、「如来に造され、如来の事を行ずるなり」という漢訳を一層明確にしたものといえよう。そしてこの教えを説く者、即ち法師は、

「人間のあいだに、この説教を説き明かすために、世間の人を慈しみ憐れんで、『前世に於ける』[○]誓願の力によって『この世に』生れた、如来さながらの人であると知るべきである。」

というのである。ここでも漢訳の時と同様に自らの誓願で、世間の人を慈しみ憐れんで生れて来た者であることがわかる。即ち、一旦は三菩提に到達した者が、「この世に存在する者たちのために、この世にみずから生れた如来の使者である」ということになる。

ここで前世に於ける「誓願」とは、言うまでもなく、衆生を憐み救済するために、「如来さながらの」事を行ずるところの如来使たる誓願である。この崇高な誓願を果すため「この世にみずから生れた」ことになるのである。このように見えてくると、法師たる者の立場が如何に前世からの因縁、特に自らの誓願によっているものであるかがわかってこよう。

「如来のなすべきことをなす人」が法師であるというのであるから、まさしく法師は如来と同じ事を実行する人であり、「如来さながら」の人たる自覚を持つことが、その使命を果していく上で、如何に大切であるかわかるであらう。

う。法師としての使命を果すことは以上の経文からすると、仏と全く同じ事をなすことにある。仏と全く同じ行為をなすから「如来使」と称されるのであり、「仏の滅後に仏に代って法を説く者」を法師と名付けることになる。既に上述の如くこの法師は、過去の世に在って、三菩提を成じ清浄の業報を得ているのであるから、本来仏と同体の者といえる。

その人が再び法師として、此の世に生じて法を弘めているのであるという自覚を持たなくては、末法の法師として忍難弘経の道を進むことは不可能となってくる。この点については勸持品に詳しく述べられている如くであるが、法師品の中でも「而此経者、如来現在、猶多怨嫉、況滅度後」とあり、更にこれに続いて「為他人説者、如来則為^⑪、以^⑫衣覆^⑬之」とある。梵文では「また他人に聴かせようとする、これら良家の息子たちや良家の娘たちは、如来の衣服で包まれた人と知るべきである。」^⑭となっており、一見、同様の内容のようであるが、他人の為に此の経を「説いて」「聴かせようとする」者は、すべて如来の衣で覆われ、又如来の御手で頭を摩でられることになるのである。

ここでは、仏によって説かれた法は、法師によって解説され、これを聴聞した良家の息子・娘等は、未聞の徒を誘って共に「聴かせようとする」行動をとることを指していると考えられる。「為他人説者」とは明らかに法師の立場であり、「他人に聴かせようとする良家の息子・娘たち」とは、仏から派遣された「化人」のことであるとも考えられる。即ち漢訳と梵本とは微妙な相異が認められるが、これは実に「説く者」（法師）の立場と、その「説く者」をして補佐し、「聴かせようとする」働きをなす者との立場を、それぞれ表したとも考えられるのである。

所謂、「法師」と「化人」との関係ということになるであろうが、此の両者について更に調べてみると、

法華経に現れた法師と化人（上田）

法華經に現れた法師と化人（上田）

「若我滅度後、能説此經者、我遣化四衆、比丘比丘尼、及清信士女、供養於法師、引導諸衆生、集之令聽法、若人欲加惡、刀杖及瓦石、則遣變化人、為之作衛護、」⁽¹⁴⁾

とあり、「能説此經者」に対しては、四衆を始め「清信士女」を遣わして、この「法師」即ち能説此經者を供養し、更に諸の衆生を引き入れ、「これを集めて法を聴かしめん。」とある。これで明らかな如く、法を説く法師に対し、仏は既に教化した四衆や清信士女に至るまでを派遣し、その法師を扶けて「集之令聴法」をなし、總てのものに法を聴かしめるようにしむけることをなすというのである。この「集之令聴法」を行い、「為之作衛護」を実践する者のことを、「則遣變化人」というのである。この「變化人」については、

「葉王我於余国、遣化人、為其集聴法衆、亦遣化比丘比丘尼優婆塞優婆夷、聽其說法、是諸化人、聞法信受隨順不逆。」⁽¹⁵⁾

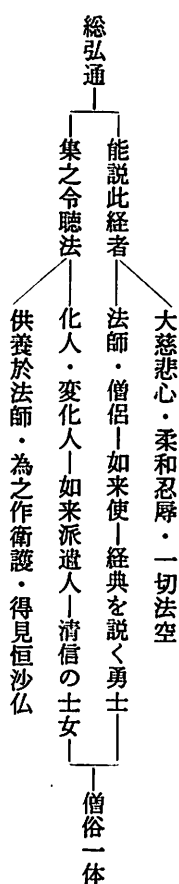
とある。これは仏がその弟子に向つて、如来の滅後に是の法華經を広く説こうとするならば、如来の「衣・座・室」の三軌に従つて説くべきことを述べたあとに続く一文である。

即ち広く是の經を説く者があつたならば、「化人を遣はして其れが為に聴法の衆を集め聴かしめん。」というのである。是の化人は自ら法を聞いて信伏随順すると共に、未信未聞の衆を集めて聴聞させる働きを持っていることになる。「化人」とはこの故に、仏の「化身」とも考えられよう。

つまり、説く者（法師）と、聞く者（衆人）とがあれば、一応は教法が伝つて行くと考えられるが、在世はともかく仏の滅後は、此の兩者だけでは不十分である。そこで仏は此の間に「化人」を派遣して「集之令聴法」をなさしめたものといえる。

四、

此の法師品の經文を、現實に当てはめて考えてみるならば、法師即ち僧侶が、信行を盛んにしようとしてグループを作り、法を説く者としての活動を開始した時、此の会の幹事・世話人として、同信の徒はもちろん未信未聞の衆を誘引し、その僧侶の説法を聴かしめる者がいたとしたら、この人はまさしく「化人」であり、仏から派遣され、法師を扶ける者であって、若しもその法師が刀杖瓦石を加えられそうになった際は、これが為に衛護をなす者を「変化の人」とも呼んでいるのである。



元来、仏によって説示された教法は、法宝として尊重されているが、教法だけでは衆生救済はできない。周知の如く此の法宝を弘め伝えて行く法師即ち僧宝がなくては法宝は弘まって行かないのである。そこに当然のことながら僧宝の必要性、重要性が出てくる。仏・法・僧の三宝はこうして古来貴重な宝として尊崇されて来たのである。なかでも僧侶は仏滅後末の世に仏法を弘める使命を持った者として、その責任は重いものがある。

常不輕菩薩品によれば、仏が得大勢菩薩に次の如く語っている。

「彼時四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷、以瞋恚意輕賤我故、二百億劫常不值仏、不聞法不見僧、千劫於阿鼻地獄受大法華經に現れた法師と化人（上田）」

苦惱。⁽¹⁶⁾
」

仏を瞋恚輕賤した罪により、二百億劫もの永き間、「仏に値はず、法を聞かず、僧も見ず」千劫にわたって阿鼻地獄へ堕ちて大苦惱を受ける結果となった、というのである。即ち「仏・法・僧」の三宝にまみえることができず、為に法を聞くことが出来なかったとすることは、結極のところ「不見僧」により「不開法」「不值仏」となったの意であつて、「不見僧」が、「受大苦惱」の第一前提となつてゐることがわかるのである。

僧を見ることができていれば、自ずと法を聞くことができていたはずであり、法を聞けば、又当然のことながら法を通して仏に値い奉ることも可能であつたわけであるから、「不見僧」が一番問題となつてくることになる。つまり此の文から考えられることは、僧は法を説く者であるということであり、僧に会うことのできなかつた者は、不幸にして法を聞くことも、仏に値うこともできないということになる。

法華經では一般的に、仏の教化に浴したものを善男子・善女人と呼び、その中でも出家者を比丘・比丘尼、在家を優婆塞・優婆夷と称していることは周知の如くであるが、そうした中でも特に法を説いて衆生を教化する者を法師と呼び、菩薩とも称し、不輕品では「僧」といつてゐるのである。

本来、僧はSanghaで僧伽と音写され、三宝の一宝に数えられてゐることは周知の如くであるが、一般に僧といへば出家剃髪して仏に従つて法を修行していく者のことであり、『大智度論』では「多くの比丘の一処に和合する、是れを僧伽と名づく。譬えば大樹の叢聚する是れを名づけて林と為すが如し。一一の樹を名づけて林と為さざるも、一一の樹を除かば亦林なし。一一の比丘を除かば亦僧無し⁽¹⁷⁾。」とあるので、最初は比丘の集團のことであつたようである。譬喩品には「亦見⁽¹⁸⁾於汝及比丘僧。並諸菩薩」⁽¹⁸⁾とある。爰では比丘僧・諸菩薩と並列して出ているが、「比丘僧」

として比丘と僧を同意に扱っているものと考えられよう。又「侶」は人を集める意味を持ち、仲間・同類・ともなう・つれだつといった用例が多いことから、僧侶といえは「比丘の集まり」といった意に解することができる。これが後に比丘尼も加わり、比丘・比丘尼の集まりという意味で使われ僧尼・僧伽・僧徒といった言葉も生れるに至った。また次第に僧の出家集団と、俗の在家集団に分かれて、それぞれ修行をするようになり、出家者は専ら僧坊・僧院に籠って仏道修行に専念する傾向となった。現在、僧侶が寺院に於て、僧籍を持ち僧衣を身に着けて生活しているのも、こうした流れを汲むものである。信解品では四大声聞が、「我等居僧之首、年竝朽邁。」と述べており、五百弟子受記品では「声聞亦無數、三明八解脫、得四無礙智、以是等為僧」とあり、また寿命品によると、

「時我及衆僧。俱出靈鷲山。我時語衆生。常在_レ此不_レ滅」⁽¹⁹⁾

とあって、ここでは仏が「衆僧」を伴って靈鷲山に現われ、衆生に不滅について語っているのである。仏が晩年に至り多くの僧を連れて靈鷲山に在り、説法教化されている姿が浮かんでくる。尚、此の文に続いて「以方便力故 現有滅不滅 余国有衆生 恭敬信行者 我復於彼中 為説無上法」とあり、梵文では「余はここで入滅したのではない、僧たちよ、あれは余の巧妙な手段なのだ。余は繰返し繰返し生命のある者の世界にいる。」⁽²⁰⁾とあって、ここでも「僧たちよ」と呼びかけている。又序品では、菩薩が種々の物を「施_二仏及僧_一」とある。

仏弟子の中には、勿論在家の弟子も多くいたことであろうが、出家の弟子、即ち声聞僧は常に仏のそば近くに在つて、師匠たる仏に使え給仕し修行に励みつつ、菩薩僧は時に仏を補佐して代講し、特に仏滅後の世には法師となつて、仏に代り「仏の事を行ずる」者としての付嘱を受けているのである。つまり「恭敬信行者」であり、その代表が上行等の本化と称される四大菩薩であつて、末法の唱導師とされ、神力品別付嘱の主役となっている。日蓮聖人は又

法華經に現れた法師と化人（上田）

その流れを汲み取って、「法華經の行者日蓮」を名乗っている。法華經の行者とは、此の經の中に説かれている如来使として、「如来の事を行ずる者」という意味が籠められている。故に「日蓮ハ法華經ノ御使也。」⁽²¹⁾と云い更に「日蓮法華經の法師たる事疑ひなき歟」⁽²²⁾とも述べている。不輕菩薩にしても、仏に従ってその教えを修行してきた出家沙門であり僧であつた。身延の聖人へ棧敷女房が「白きかたびら布一切」を供養してきた時に、「僧のき候物をくやうし候。其因縁をとかれて候には、過去に十萬億の仏をくやうせる人、法華經に近づきまいらせ候とぞとかれて候へ。」⁽²³⁾と法師品の文を引き、自身を「僧」と表している。

涌出品には、「仏昔從積種 出家近伽耶 坐於菩提樹」⁽²⁴⁾とあるので、仏自身「出家」された僧としての道を歩まれたことがわかる。

方便品によると、仏が始成正覺の後、鹿野苑に於て、五人の比丘に始めて説法したことをとりあげ、

「以三方便利故 為五比丘説 是名三轉法輪 便有涅槃聲 及以阿羅漢 法僧差別名」⁽²⁵⁾

とある。梵文ではこれに相当する箇所で、「五比丘」のことを「五人の僧」と訳し、更に「及以阿羅漢 法僧差別名」は、「アルハットという言葉、教えという言葉、また僧団という言葉が、この世に現われた。」⁽²⁶⁾と訳されている。この「僧団」については特に「注」を付し、「僧たちの集団」のことであつて、「一般に仏教の出家者を僧という」とし、「茲にアルハット・教え・僧団と列挙されている三者は、漢訳仏典では一般に仏・法・僧（これを三宝という）と記される。茲に、この三者が、この世に現われたというのは、仏教が成立するに至ったことを意味する。」⁽²⁷⁾と記している。即ち、僧は前述の如く仏弟子の出家者を意味し、仏陀と、説かれた教法と、それを伝え弘める僧侶との三者をもって「三宝」と称し、この三宝により仏教が成立したとみなされていることがわかる。従つて僧侶は仏教を成立

せしめる三者の中の一であり、仏法を伝え弘めることを使命とするものであって、特に仏の滅後にあっては、如来使として、如来の事を行ずる「如来さながらの人」であり、「如来とひとしく供養される」ことになる。故に僧侶は「常に法を説く者」でなくてはならない。此の常に法を説く者を「法師」と称し、上述の如く法師品ではその法師に関する詳説がなされているのである。また梵文では法師のことを、「この經典を説く勇士」⁽²⁸⁾とも訳されている。法師は勇氣を持って脅迫・非難が与えられてもこれに屈せず、強く生きて行かねばならない。日蓮聖人は「よき師者、指たる世間の失無して、聊のへつらふことなく、少欲知足にして慈悲有らん僧の、經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉第一の法師也と讃められたり。」⁽²⁹⁾とも述べ、僧と法師とを同一視している。分別功德品には「比丘僧」とあり、僧坊を造立し衆僧を供養することが説かれている。

また法師品によれば、迫害が加えられようとした時は、変化の人が遣わされ、衛護を受けると同時に、聴法の衆を集めて、この法師の所説を聞かしめんとするというのであるから、法師即ち僧侶を扶ける変化の人は一つには「為之作衛護」の働きをし、二つには「集之令聴法」の役目を果たすことになるのである。

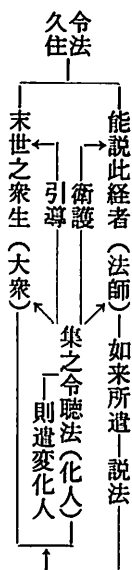
日蓮聖人は、法師品の「当知是人^レ与如来^ニ共宿」と「慇^ニ衆生^ニ故生^ニ此人間」の文をあげて、「是故作法受職灌頂、比丘^ハ信行^ハ比丘^ハ与俗衆^ニ共致^ニ礼^ヲ拜^ス、供養恭敬^{セシ}事可^レ如^レ敬^ス仏^ヲ」⁽³⁰⁾と述べ、比丘と俗衆の立場を明確にしている。

則遣變化人
——為之作衛護——外に向つては法敵からの衛護——
集之令聴法——内に向つては聴聞衆を集める——
——供養於法師——

これを要するに各寺院、教会、結社に於て、法師を補佐し信行増進の爲の核となり、自ら進んで、信徒・未信徒を誘つて「集之令聴法」の經文を実践する者即ち、「他人に聴かせようとする者」があれば、まさしくこれは「先達」

法華經に現れた法師と化人（上田）

であり、「則遣變化人」であるといえよう。



五、

次に法師功德品を一見することにしよう。爰では仏が常精進菩薩に法華經を受持・誦誦・解説・書写することの功德を明らかにしているが、最初は例の如く「若善男子、善女人」と広く一会の大衆に呼びかけているが、会座が進むにつれて、次第に「教えを説く者」即ち法師について述べているのである。つまり呼びかけは広く善男子・善女人であるが、内容は「教えを説く者の受ける恩恵」であった。即ち

「若於大衆中 以無所畏心 說是法華經 汝聽其功德 是人得八百 功德殊勝眼」⁽⁹¹⁾

とあり以下耳・鼻・舌・身・意の六根清淨を得ることが記されているが、いずれも「法華經を説く者」所謂、法師についての功德を述べているのである。⁽⁹²⁾ 例えば耳根の箇所では、

「法師住於此 悉皆得聞之 一切比丘衆 及諸比丘尼 若誦誦經典 若為他人説」⁽⁹³⁾

とあって法師は、仏を始め總ての微妙の法の音声を聞き、功德を得ることができるとしている。法華經を持ちこれを他の為に説く者、即ち法師は、六根清淨を得ると共に恭敬供養を受け、百福莊嚴し歡喜愛敬せられんとも説かれている。

「能以千萬種 善巧之語言 分別而演說 持法華經故。」⁽⁹⁴⁾

という語で此の品はしめくくられている如く、善巧の語言を数多く用いて、分別しながら法華經を演說せよ、というのであるから、これは布教をする上で、特に注意しなくてはならない事項といえよう。

法華經を弘めることの功德が説かれたあと、最後に布教の心得が示されているのである。つまりとぼしい言葉で、無分別に法を説くのではなく、豊富な言語を用意し、能く対告衆と時と国土等を分別して説かなくてはならない。法師たる者はしたがって布教に關しても充分なる修行を積み、聽聞の衆から歡喜愛敬されるよう精進しなくてはならないことになる。聖人によれば、「僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり。貴辺すでに俗也、善男子の人なるべし。」⁽⁹⁵⁾と推地四郎に記しているが、法華經一句たりとも語る者は、誰彼の別なく如来の使者であるとしながらも、「貴辺は俗なので善男子である」と述べている点に、特に注目すべきである。「善男子とは法華經を持つ俗の事也」⁽⁹⁶⁾ともある。

因みにこの法師功德品のしめくくりの經文は、梵文では「すべての者に教えを説く者は、教師の位にある」⁽⁹⁷⁾とあり、「教師」となっているが「法師」と同意であらう。すべての「法師」は教師として、法を説くこと、あらゆる者に教えを弘めることが「教師の位」にあることを意味している。この一文は教師たる者の注目すべき經文といえるであらう。常に座右にあつて精読しつつ、その意を汲み実践に向けて努力すべきことである。

所謂、經文の「如来の衣を身に着ける」とは、言う迄もなく「如来に代つて」という意味も含まれているのであるから、「如来の座に着き」法を説くことになる。法華經を説く者はその自覺と責任を感知すべきであり、諸經の法師よりも一層の精進がなされなくては「善巧之語言、分別而演說」ができなくなる。弘經の功德甚多なることのみを考

えることなく、更にそこにある責任と使命に徹すると同時に誇りを持つ必要がある。

斯くの如く法師、即ち布教をなす者の自覺に立つことにより、法師品の結文が示す如く、

「若親近法師 速得菩薩道 隨順是師學 得見恒沙仏」⁽³⁸⁾

となるのである。この「法師」は上來述べた如く、「法華經を仏に代つて説く者」即ち「如来の法衣」を着けた僧侶であり「教師」であつて、常に教化の爲の努力を積む「布教師」であるといえよう。これを又「如来使」とも稱しているのである。

日蓮聖人は、この「如来使」の實踐に終始され、末代の教師に範を示されている。『觀心本尊抄』には、

「此時地涌菩薩始出^三現世^二但以^三妙法蓮華經^二五字^一令^レ服^三幼稚^二。因謗隨惡必因得益^{是也}。我弟子惟^レ之^三。地涌千界教主^三初發心弟子也^二」⁽³⁹⁾

とあつて、末法の世に地涌千界の本化により妙法の弘布が述べられている。特に「我が弟子これを惟へ」の語に注目すべきである。教主釈尊の初發心の弟子たる本化の如来使たる自覺に住することを「我弟子惟^レ之^三」という語の中に籠められているといえる。故に右の文に続いて、

「當^レ知、此四菩薩現^三折伏^二時成^一賢王^二誠^三責愚王^二三行^一攝受^二時成^一僧弘^三持正法^二」。

とある。即ち本化仏使は、「僧となつて正法を弘持す」という点に、更に注目すべきである。僧は正法たる妙法を受持し弘布することを責務とすることが明示されているのである。これを要するに、僧侶は如来の衣、座、室三軌を体し、法を説くことにより、変化の人の外護を受け、「集之令聽法」の經文によって、有信、未信を問わず、「令^レ服^三幼稚^二」を果し、以て「皆婦妙法」の大願を成就することができることを、爰に再確認しなくてはならない。

従来、「如来使」又は「法華經の行者」というと、直に湧出品の「本化上行」「地湧千界」をもって論ずるが、法師品の「法師」の立場をふまえた上での「仏使上行」でなくては、真の意義が伝達されにくい。つまり本化上行としての在り方の具体性は、法師品を通して見るにより得られるのである。又法師品の所説は、湧出品に於て一層の理念が深いものとなるのである。

迹門の流通分であるという理由で、法師品を軽視することは、本化上行の実践的在り方を軽視することにつながるものといえよう。法師品の「如来使」は「如来所遣」であって、この法師が湧出品では更に本仏との重厚なる因縁により、上行を始めとする四導師を中心にした無量の菩薩として湧出し、末世の弘教を誓っているのである。日蓮聖人も此の間の教儀を、自身とその檀越の上に当て、四条金吾に宛た御書の中で、次の如く述べている。

「法師品の文に遣化四衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と説給ふ。此中の優婆塞とは、貴辺の事にあらずんばたれかささむ。すでに法を聞いて信受して逆はさればなり。不思議や、不思議や。若然ば日蓮法華經の法師なる事疑なき歟。則如来使にもにたるらん、行如来事をも行ずるになりなん。多宝塔中にして二仏並坐の時、上行菩薩に譲り給し題目の五字を日蓮粗ひろめ申なり。此即上行菩薩の御使歟。貴辺又日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人にかたり給ふ。是豈流通にあらずや。法華經の信心をとをし給へ。」⁽⁴⁰⁾

即ち、聖人は自ら法師品所説の「法師」たる自覚を持ち、これに帰依して「集之令聴法」に勤め、外護の念篤き金吾をもって「化人」としている。その上で更に「上行菩薩の御使歟」と「仏使上行」たることへの道を開き示しているのである。

こうした御書から、再び觀心本尊抄の地涌千界が「僧となつて正法を弘持す。」という一文を見る時、僧即ち法師

法華經に現れた法師と化人（上田）

と化人との関連に深い意義を觀取することができよう。

〔註〕

- (1) 一例をあげれば、「我所説諸經 而於此經中 法華最第二」（法師品）大正藏 九一三二頁
- (2) 大正藏 九一三〇頁
- (3) 同 同
- (4) 同 九一五頁
- (5) 守護國家論 定造 一二八頁
- (6) 南条殿御返事 同 一二七頁
- (7) 千日尼御前御返事 同 一五四五頁
- (8) 大正藏 九一三〇頁
- (9) 同 九一三一頁
- (10) 法華經（岩波版）岩本裕訳 中 一四三頁
- (11) 同 同 一四五頁
- (12) 大正藏 九一三一頁
- (13) 法華經（岩波版）岩本裕訳 中 一五三頁
- (14) 大正藏 九一三二頁
- (15) 同 九一三一～二頁
- (16) 同 九一五一頁
- (17) 大智度論第三卷大智度共摩訶比丘僧祇論第六 大正藏二五八〇頁
尚「有薩僧、無薩僧、啞羊僧、実僧」の四僧を分ち、有薩僧と実僧を選び、更に「是中実声聞僧六千五百、菩薩僧二種、有
薩僧実僧、以是実僧故余皆得名僧、以是故名比丘僧。」とある。
- (18) 大正藏 九一五頁
- (19) 同 九一四三頁

- (20) 法華經(岩波版) 岩本裕訳 中 三一頁
- (21) 与北条時宗書 定遺 四二六頁
- (22) 四条金吾殿御返事 同 六三七頁
- (23) 棧敷女房御返事 同 一八六〇頁
- (24) 大正蔵 九一四二頁
- (25) 同 九一〇頁
- (26) 法華經(岩波版) 岩本裕訳 上 一二七頁
- (27) 同 同 三八四頁
- (28) 同 中 一六五頁
- (29) 法華初心成仏鈔 定遺 一四二三頁
- (30) 得受職人功德法門鈔 同 六二七頁
- (31) 大正蔵 九一四七頁
- (32) 梵漢対照新訳法華經(南条文雄・泉芳瑠共訳)では「この經典を衆会のうち、畏るることなく勇猛に、演説開示する人。」
(三九七頁)とある。
- (33) 大正蔵 九一四八頁
- (34) 同 九一五〇頁
- (35) 推地四郎殿御書 定遺 二二七頁
- (36) 秋元殿御返事 同 四〇七頁
- (37) 法華經(岩波版) 岩本裕訳 下 一二七頁
- (38) 大正蔵 九一三二頁
- (39) 観心本尊抄 定遺 七一九頁
- (40) 四条金吾殿御返事 同 六三七頁
- (41) 正法華經では法師品が薬王如来品第十となつてゐるが、化人については、「化作化人」「喜遣化人」「多遣諸化人」等とあり、妙本とほぼ同様に訳されてゐる。(大正蔵九一〇二頁)

法華經に現れた法師と化人(上田)